

「みわの光」

細田愛（ほそだ・あい）は短大を卒業後、地元のスーパ―に正社員として約二十年勤務している。二〇一九年冬、社会全体に新型コロナウイルスの脅威がまん延し、スーパ―には毎日、数少ないマスクや食料、物資を求めて客が押し寄せ、彼女は膨大な業務に追われる。そして、そんな時、小、中学校時代からの友人、長井みわが客としてやってくる。みわは四人の幼子連れ、カートを二台持ち、店の中を物色する。みわは「久しぶり」と言って、細田のいるレジへやってくる。今まで長井と顔を合わせないようにしていたが、とうとう声をかけられてしまった。昔から体が大きく、気が強い長井みわは周囲の子供を散々いじめてきた性悪女だったのだ。彼女のせいで全然楽しくない子供時代を送った細田は四十歳になった今でも彼女を嫌い、恐れ、なるべく関わらないように勤務していた。長井の持ってきた膨大な商品の数に辟易しながら商品をスキャンする細田。そして彼女の子供が掴んでいたペットボトル飲料をスキャンせずに行かせてしまう。後から同僚の関家せきいに、長井の家族が万引きしていることを指摘され、細田は自分の過失で万引きを見逃してしまったことを悔やむ。関家は同僚で、今は店長代理として細田と共に働いている。口数が少なく、減多に自分のことを話さない。彼は長井親子は膨大な商品をカートで運んで、その際に子供にいくつか商品を持たせたままレジをスルーしていることを指摘するのだった。

翌日、細田が店で作業をしているとみわが話しかけてきた。

場を出、宗太と共にアパートに向かう。そこで、見たのは布団の上に横たわる意識のないみわであった。みわのそばに大量の睡眠導入剤が散らばっており、細田は救急車を要請する。が、みわは目を覚まし、意識が戻る。もう、ずっと寝ときたかたつてん、とつぶやくみわに細田は、「ええ気味やわ」

と放ち、もう知らんと言ってアパートを出る。細田は施しのつもりでみわ達の住む部屋のドアにゴミ袋と一万円、店の求人広告を入れといてやった。数日後、みわは細田の勤めるスーパ―に履歴書を持参し、パートとして採用される。また自分の身辺を荒らされると危惧する細田。みわが性悪根性を発揮する前に潰してしまおうと彼女は徹底的にみわを厳しく指導する。細田はかつていじめられていた自分や友人たちへの仕返しのためみわをしがくが、それが関家に見破られており、性格が悪いと指摘されてしまう。細田は自分の性格について言われて腹が立つどころか、逆にうれしく感じてしまうのであった。みわはレジ業務が一通りできるようになると突然、退職を願い出る。さらに条件のよい近隣の大手スーパ―に採用が決まったのだった。店を出る間際にみわは細田に、「あの一万円返せへんから」と、言い放つ。饒別やから取つといて、という細田に、「ほんまに悔しかつてん。この先も一万円はあんたに借りてることにする。借りている限り、ずっと腹立ったまんまでおれる」

と言って出ていく。細田は去っていく長井親子を一瞥するが何も言わずに通り返る。

「アパートに奥菜穂子と長谷川ゆかも住んでんねん。夜に集まるから来いへん？」

みわの住んでいるアパートは地元では通称、離婚アパートと言われ、収入の少ないシングルマザーが入るアパートだ。ああ、そうなん、なつかしいなあ、ちょっと忙しくてさあ、行けたら行くわあ……、と曖昧に返答する細田。奥も、長谷川もかつてのみわの取り巻きで、彼女の周りをうろついていた友人であった。細田が早番で帰ろうとすると、なんとみわとその取り巻き、奥と長谷川が彼女を待ち伏せし、高額な化粧品を売りつけてくる。細田は、機転を聞かして関家に助けを求め、その場から離れることに成功する。そして、その翌日、みわは再び店を訪れ、昨日のことを細田に詫げる。みわから、みわの夫が自殺し、それ以後、長井は働く気力も湧かず、子供もみな、保育園、小学校には行かなくなっていると、衝撃の告白を聞く。それでも、彼女を許せず、理解ができない細田。感染者が急激に増え、緊急事態宣言が出され、恐々とした雰囲気きんぎょが社会全体に押し寄せるようになり、細田は業務に忙殺されるようになる。出口の見えない脅威に晒される世の中だが、そんなある日、みわの長男である宗太そたが店にやってきて、連日買物をしていくことに気づく。宗太は小学校四年生くらいだが、体格がよく、受け応えもしっかりした男の子だ。それとなく、みわの近況を聞き出そうとする細田だが、同時に宗太の優しさにも気づき、みわの家族が気になります。ある日、彼女が店にいと、宗太が泣きながら助けを求めてきた。

「おかあちゃん、呼んでも目、覚まさへん」

と。みわを放っておけず、仕方なく、関家に嘘をついて職